学生相談体制におけるピア・サポートの再検討

健康科学部門
足立　由美

1. 問題と目的

ピア・サポートとは「仲間による支援・援助活動」であり，「ピア・サポーターとして訓練を受けた者が自覚をもって仲間を支援・援助する」ものと定義される[1)]。大学教育におけるピア・サポート活動には，サポーターが相談相手になる「相談室型」，学習支援者になる「修学支援型」，新入生の良き先輩になる「新入生支援型」などの分類[1)]や，「相談機能」と「つながりを創り出す機能」などの分類[2)]があり，多様な展開を見せており定型はない。

金沢大学では2004年10月から専用スペースをもつ「相談室型」のピア・サポートを開始した。8年目の2011年4月から筆者がピア・サポート・ルームを統括することになったことから，これまでの活動や運営のふりかえりが必要になった。本研究の目的は，ピア・サポートというシステムをより機能させるための考察をすることである。

2. 方法

本学のピア・サポートが目的に沿って機能しているか，より機能させるにはどのような展開が必要かを，分析した。1) 相談機関としての評価は2011年度金沢大学学生生活実態調査から分析した。保健管理センターと，全学の教員と学生相談員が相談相手になる「なんでも相談室」を比較対象とした。2) 活動内容の評価については，ピア・サポーターとその他学生からの聴取と，相談記録から分析した。

3. 結果

1) 相談機関としての評価

施設・制度についての認知度は，「ピア・サポート・ルーム」が9.5%，「なんでも相談室」が43.6%，「保健管理センター」は51.2%であった。利用・参加経験の有無は，「ピア・サポート・ルーム」が0.3%，「なんでも相談室」が23.5%，「保健管理センター」が36.6%であった。現在，興味のある施設・制度は，「ピア・サポート・ルーム」が3.3%，「なんでも相談室」が7.7%，「保健管理センター」は8.2%であった。

2) 活動内容の評価

＜利用状況＞

設置当初は週2日×3時間の開室で開始した。2006年度に週5日×4時間の開室となり，原則1回のみとしていた相談を継続可としたり（ただしスーパーヴァイザーが認めた相談者のみ），メール相談を始めるなど大きな変更があった。設置3年目の2006年度がもっとも相談件数が多く，のべ48件であった。その後は減少し，20件前後となっている（図1,2）。

＜相談内容・相談者の傾向＞

時系列にみると，設置当初は，全学的な宣伝もあってか，ピア・サポーターになりたい人や教員が様子を見に来ており，それに対応していた。自分が困っていることを相談に来たケースもあるが，カウンセリング等に興味があって利用するケースや，友人がいないため雑談を目的に利用するケースが見られた。メール相談を開始したときは，心理系の資格についての相談や学内案内で終わる相談が見られたが，匿名のものが多かった。その後，自殺念慮のある学生がメールを送って来たり，自傷行為のある学生が訪ねてきたり，ピア・サポーターが困るような深刻なケースも出てきて，安全配慮上の問題が生じてきた。ここ数年は，カウンセラーがクライエントを紹介したり，看護師が勧

めたりするケースが増え，発達障害傾向のある学生や統合失調症の学生がリピーターとして利用している。ピア・サポーターの友人の利用も多かった。

4. 考察

本学のピア・サポートはさまざまな相談に対応してきた実績があるが，相談室型の課題も見出された。支援する側とされる側がはっきり分かれていることで，相談者側は支援されることに抵抗があるものと考えられる。ピア・サポーターも，学生である以上，学内で今後出会う可能性があるため，どこまで具体的な情報を聞いていいのか，お互い気まずくなるのではないかという抵抗をもっていた。疾病や障害など配慮が必要な学生のこともどこまで情報共有するのか，難しい。専用スペースがあるとピア・サポーターの居場所になってしまい，相談者が入りにくいという問題もある。

ピア・サポートの効果や有効性については，サポーター側の学生の成長を報告したものが多いが[3) 4) 5)]，学生相談体制の一部としてピア・サポートを位置づけるなら，相談者側の視点に立ち，問題解決につながる活動ができたかどうかを評価する必要があるだろう。金沢大学のピア・サポート・ルームの場合，最近の学生のニーズは「相談」よりも「関係の提供」にあると考えられるため，今回の分析結果を元に，今後のピア・サポート活動を再検討したいと考えている。

（本稿は，2012年5月の日本学生相談学会第30回大会の発表抄録をまとめなおしたものである。）

引用文献

1) 早坂浩志.「ピア・サポートへの取り組み」学生相談ハンドブック．日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会．学苑社；2010；196-201.

2) 松田康子.「『北大版ピア・サポート』創生へのチャレンジを」北海道大学ピア・サポート活動報告書（平成22年度版），2011；97-110.

3) 杉村和美・小倉正義・加藤大樹・松岡弥玲・山田奈保子.「ペア相談と学生の主体性を取り入れた大学でのピア・サポート活動ー名古屋大学における実践を通してー」青年心理学研究, 2006；18；51-62.

4) 大石由起子.「高等教育におけるピアサポート導入の教育的効果と期待」大学と学生，2010；561；16-21.

5) 内野悌司・石田貴洋・三浦寿秀・栗田智未・兒玉憲一.「広島大学ピア・サポート・ルームの活動評価についての考察」広島大学保健管理センター研究論文集　総合保健科学, 2013；29；13-23.

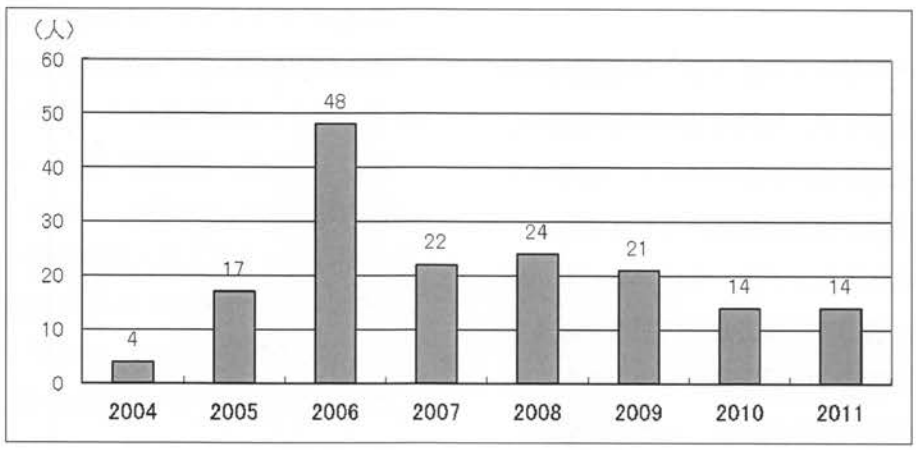

図１　年度別相談件数（2004-2011 のべ人数）

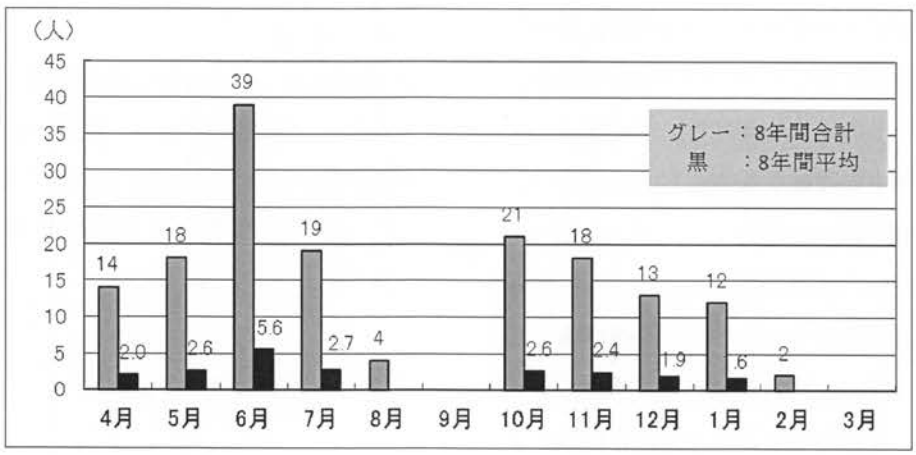

図２　月別相談件数（2004-2011 のべ人数）